

名ばかりで、人民に銃を向けたということでもって非常にみんな怒ってるんですね。北京のイスラーム教の研究者の林松先生っていう人がその慰霊塔の碑文を書いております。「七日七晩に渡って妖魔が跳梁した」と書いてますけども、ほんとうに酷い事件だったようですね。そんな関係上、なんとしてでも自分たちの文化というものをまた復興させるという意気込みで、去年沙甸に中国で一番でっかいイスラーム教の礼拝所(チンチェンアー)(清真寺)が建てられています。ものすごくでかいものです。みんな見せたがるのね、こんなの作ったんだぞ、こんなの作ったんだぞって言って喜んで見せたがるんですけども、すごく立派なもので、とても中国とは思えない、東南アジア風の礼拝堂が建ってる。その礼拝堂に色々な人の写真とか貼り付けられていて、写真の中に馬聯元の写真もあります、高哈吉(カオハッ)と言われるだけあって、随分背が高い人だなというのがわかりますね。そういう経験をこの夏しました。ちょうどイードルフィットル(断食明けの祭)に当たって、とてもイスラーム教徒の人達が元気になって喜んでる時期だったものですから、あっちに連れて行かれたり、こっちに連れて行かれたり、1日に2回宴会をやったり、そういう楽しいというかお腹一杯になっちゃう経験をしましたけれども、色々な人の動きがあって、その中から色々な文化というものが生まれてくるんだなと思いました。この昆明にね、会社経営をやってる人がいて、そこにサラール族という(チンハイ)青海省の田舎のほうに住んでいるトルコ系のイスラーム教徒の民族がいるんですけども、そのサラール族の人が集団で出稼ぎに来て、仕事してる。それでイードルフィットルのお祝いしているのですね。イスラーム教の院長先生がそこへも行きましょうっていうことで行って、ご馳走になって。「ご馳走になったんだから、あんたもなんか説教しなさい」って言われて、下手くそなアラビア語で説教をしましたけれども。そういう経験をしました。大体、1時間位しゃべったから、ここまでにしましょう。

*****質疑応答*****

東長 それでは引き続き、質疑応答の時間に入りたいと思います。まず私からいくつか質問させていただきます。私は、存在一性論の神秘哲学研究からこの道に入りました。私自身はアラブのエジプトで勉強したんですが、先生の学ばれたイランの研究における伝統について3点ほど伺いたしたいと思います。

1点目として、イランにおけるイスラーム哲学、イスラーム神秘主義研究のありかた——アーシュティヤーニー先生が、伝統の中に自分が生きて、伝統を自分が体現しているんだというのがその一例だと思いますが——と、それから欧米や日本における研究のありかたの間には、当然違いがあると思うんですけども、思想研究のありかた、目指しているものに、どういう違いがあり、それぞれにどういうメリットやデメリットがあるのか、教えていただければと思います。

2点目ですが、私自身が大学に入りました時には、もうイラン革命が起こっておりましたので、イラン革命後のイスラームしか知らない。先生ご自身はイラン革命の前に留学なさって、その後もイランに何度もいらっしゃってますので、パフラヴィー朝下、つまり革命以前のイランにおける学問のありかたと、革命後のそれがどう違うのか、というのを教えていただければと思います。特に私自身が気になっていますのは、イルファーン(叡智学)——イブン・アラビーの存在一性論とスフラワルディーの照明哲学、イブン・スィナー流の逍遙学派哲学、それにシーア派の神学が混ざったものと普通言われていますけれども——についてです。革命前のパフラヴィー朝のシャーは非常にそれを宣揚していました(愚民政策に使ったんだという批判もあったと思いますが)。一方、革命後にイラン・イスラーム共和国のトップになったホメイニーは、先ほどお話にありました

ように、自分自身がその存在一性論学派に属しており、イブン・アラビーの本に注釈も書いているような人であったわけですね。この革命前と後とで、イルファーンの扱いがどういうふうに変化をしたのかについて教えて頂ければと思っております。

3点目は、サファヴィー朝では、同時代のオスマン朝やムガル朝の文献がどれくらい読まれていたのかという点です。これらの王朝では、アラビア語かペルシア語で書かれた文献が圧倒的に多いので、お互いに読めてしまいますよね。それがどの程度参照されているのかというのをもしご存知でしたら伺いたいと思っております。私自身は、オスマン朝の研究をしておりますが、スフラワルディーなどの本はよく読まれています。たとえばオスマン朝の最初のマドラサの長だったと言われるダーウード・カイサリー (1352年没) といった人の本は、イラン社会でも普通に読まれていると思うんですが、もうちょっと遅い時代の人々について、同じようなことが起こっていたのかどうかというようなことを伺えたらと思います。

松本 1点目に関してですが、まず私は、存在一性論は非常に乱暴な理論だというふうに常日頃思っております。なんでも存在という事実全部含めてしまって、差異性や個性が保証されないような哲学になっています。この存在一性論を修正しようという動きが、イランなんかの、今の存在一性論系統の思想家の中にはありますね。有名な人は、アブドゥルカリーム・ソルーシュだとか、それからシャバスターイー——この人は頭にターバン巻いている人ですけども——、そういう人達ですね。

こういう人達が存在一性論の修正ということに非常に関心を持っているので、我が同志というふうに思っているんです。存在一性論もある時期までは、それなりに有効な理論ではあったと思います。存在一性論っていう概念そのものは、ジャーミーの *Nafahāt al-uns* の中に出てくるのが最初の例だと思うんですけども、それ以降、その呼び方が定着して存在一性論学派というのは確立されたわけですね。いずれにせよ存在一性論は、政治的には帝国の理論ですね。究極原因——つまり皇帝——を中心にして全世界が展開していくという思想の枠組みを作っていくのに、存在一性論はとても便利だったんですね。ティームール朝なんて、はっきり言って存在一性論の帝国だというふうに言えるかと思えます。(ここの間野先生〔編集部注：間野英二京都大学文学研究科名誉教授。ティームール朝史の専門家〕はどういわれるか知りませんよ。) ティームール朝では存在一性論が非常に盛んで、この王朝下で存在一性論の枠組みみたいなものが確立され、その頂点にジャーミーがいたんだと思いますね。そしてそれがさらに、中国イスラームの存在一性論に結びついていくわけ。ティームール朝も、明も清もムガル朝も、みんな帝国ですよ。多様なものをその中に含めていく枠組みという世界理解として存在一性論というのがあったんだと思います。これらの帝国に対して色々攻撃が加わって来るときに、存在一性論の学者達が色々な形で抵抗するということが歴史上起ってきます。19世紀以降、イスラーム世界が西洋列強の攻撃にさらされる時に、それに対するレジスタンスを指導した人のほとんどが存在一性論学者ですね。アルジェリアのアブドゥルカーディルを筆頭に、ナジャフにおりましたアーヤトッラー・シーラーズイーとか、みんな存在一性論系統の人達で、自分たちが築きあげた安定した世界観というものが西洋列強の侵略によって崩れていくことにすごい危機感を抱いたので、存在一性論が抵抗理論になったと思うんです。それはそれで、ある程度有効ではあったんですけど。

でもやっぱりさっき言いましたように、これは男社会の理論という部分が非常に強いので、その辺をもうちょっと変えていかないと、普遍性を維持できないような気がしますね。

次に2点目の、革命前(シャーの時代)と革命後のイルファーンについての評価の問題ですが、そんなに変わらないですよ。ハサン・ハサンザーデ・アーモリーだとか、ミスバーフ・ヤズディーとか——哲学の先生ですけども——、そういった人達が頑張って、それ以前にあったイルファーンの伝統を継承・発展させています。他方、さっき申しましたように、そういうのは修正しないとだめだというグループが、アブドゥルカリーム・ソルーシュだとかシャベスタリーとかいう人達だと思います。今後どういうふうにこれが発展していくのか、まだ予測が付きませんが、修正しなきゃいけないと考えている人達がいるということは、救いがあると思いますね。まだまだ存在一性論の生命力というのは衰えていなんだなっていう感じです。

3点目に、トルコの存在一性論とペルシア語世界の存在一性論との影響関係ということですけども、オスマン朝とガージャール朝の間では戦争なんかも繰り返して行なわれているし、あまり友好的な関係じゃないということもあって、オスマン朝で発達した存在一性論とイランのそれとの間に直接交流があったと確認されてはいませんが、なかったわけではないと思います。共にイスラーム教徒で、年に1回メッカに集まればみんな意見交換するわけですから、没交渉ではなかったわけです。19世紀頃には馬復初なんかメッカ巡礼に行って、伝統的な存在一性論理解というのを誰かに開陳したら、相手がワッハブ派の人だったらいい。なんか酷く反論されてメゲちゃった、へこんじやうと記録されています。ワッハブ派ってのはしょうがないものですな。それはいろいろ受け取り方があると思いますけども。そんな風に交渉があったと思いますけど、お互いに切磋琢磨とかしなくとも大体わかってるじゃないの、という世界の話だと思いますね。

仁子 京都大学イスラーム地域研究センターの仁子です。私の専門は元々イブン・スィナーなどの哲学ですが、最近は中国イスラームのこともやっております。イランにおける存在一性論学派には、もちろんジャーミーだとか、シャリーフ・ジュルジャーニーだとか、重要な思想家がいろいろいるわけですけども、イブン・アラビーの思想ということであれば、モッラー・サドラーの中に組み込まれているという部分があると思うんです。存在一性論がイランの中で確立されていくなかで、モッラー・サドラーの存在が大きいということがあるのかなのかということについてお尋ねします。

松本 モッラー・サドラーっていうのは非常に重要な思想家で、彼の著作の中で自分の哲学をヒクマ・ムタアーリヤ(高次の叡智)というふうに呼んでいるわけですけども、ヒクマ・ムタアーリヤという言葉そのものは、ダーウード・カイサーが最初に使った言葉ですから、その辺の影響も受けていますね。モッラー・サドラーのヒクマ・ムタアーリヤというのは、イランの人達がいうところの人間完成の旅(セイロ・スルーク)と深く関わっています。コーランの第2章156章に出てくる、インナー・リッラーヒ・ワ・インナー・イライヒ・ラーजूーン(本当に私たちはアッラーのもの。かれの御許に私たちは帰ります)という言葉にインスピレーションを得ながら、私達はみんなアッラーに向かって旅をしているんだと考える。その見取り図として存在一性論というのがあって、アッサファル・ミナルハルク・イラルハック(被造物から真理者への旅)が出発点で、それからハック(真理者)の中を旅して、今度ハックからハルク(被造物)の方に帰ってきて、それからハルクの世界、つまり被造物の世界をアッラーと共に旅をするんだ、という4つの旅をするという説を確立したのがモッラー・サドラー。

こういう考えは前からあったにせよ、そういうことをハッキリと言ったのがモッラー・サドラー

だと思うんですけども、要するに存在一性論をベースとして彼の哲学というのは出来上がっていると言って差し支えないと思います。それ以前の考え方、イブン・スィナーの解釈によるんですけども、アサーラトゥル・ウジュード(存在の本性)の立場に立って解釈した結果、存在一性論という世界観に到達して、「4つの旅」というのが出来上がるということになっているんだろうと私は理解しているんですけどね。

仁子 イブン・アラビーのフスース・アル＝ヒカム(『叡智の台座』)への注釈の出版というのはもうイランの物が圧倒的に多いですね。そういうものをするモチベーションとして、関心がたとえば注釈者のカイサリー自体にあるのか、それともモッター・サドラーを介してカイサリーに行くのか、どっちなんだろうって思ってしまうんですけど。

松本 どっちなんでしょうね。存在一性論の純粋な形はどのような形なんだろうかって興味が、現代のイランのそういう哲学者達の間にはあるんでしょう。モッター・サドラーはたしかに、非常に完成した存在一性論を作り上げている。それは、色々な知識を全部散りばめた存在一性論であるわけですけど、そうじゃなくって、それになる前の純粋な枠組みみたいなものがどういう形で出来ているのかなっていう関心はみんな強く持っているんだと思うんです。存在一性論の起源をたどっていけば、言ってみればコーランに行き着いちゃうわけですけどね、そういうところまでに辿り着こうという方向に進む。モッター・サドラーがいるからとか、ダーウード・カイサリーがいるからとか、イブン・アラビーがいるからというわけではない。イブン・アラビーがいる以前から、イスラーム思想のエートスってというのは、非常に存在一性論的なものであったと私は思いますね。色々なそれ以前のホセイン・マンスール・ハッラージュだとか、バーヤズィード・バスターミーだとか、そういった初期の神秘思想家の言ってることだとかいうのを見ても、結局これは存在一性論に行き着いちゃうだろうなというふうに思います。ですから、モッター・サドラーがいたからとか、そういうものでもないでしょう。

仁子 もう1点、これは中国イスラームの思想に関する質問なんですけども、中国イスラームの思想が何によって形成されてきたかという問題があります。よく言われるのが、ペルシアの文献ですが、たとえばジャーミーがペルシア語で書くときと、アラビア語で書くときと、雰囲気ガラッと違う気がするんですね。アラビア語で書くときは論理力でゴリゴリに固めたような書き方をして、ペルシア語で書くときはどちらかという論理で攻めるというよりも、ピタッとくる感じを求めているようなイメージがあります。では、中国ムスリムが漢語で思想を表現するときに、ペルシア語のもつそういうイメージというのが作用しているのか、いないのかという疑問が僕には浮かんでくるんです。ひとつは中国ムスリムの中に論理学、論理でゴリゴリっていうものがない感じがします。その意味でジャーミーのアラビア語著作は、もしかしたら読んでいるかもしれないけども、著作の上でどうこうというのが表面化してこない。というようなイメージがあるんですけど、私のこの感想が正しいかどうかについて、松本先生のお考えをお聞かせ頂ければと思います。

松本 正しいと思いますよ。ジャーミーは、もちろんアラビア語もよく出来たと思いますけども、書いたものを比較してみると、アラビア語で書いたものと、ペルシア語で書いたものでは、格段に作品の内容が違ってきますから、ジャーミーはやっぱりペルシア語の作家であるというふうに考え

られると思います。ペルシア語世界の生み出した非常に優れた思想家——というよりも、あれはいわゆるアディーブですね、文人——だろうと思います。それが漢文で勉強する人達に非常に強い影響を与えて、漢文の著作の中に、論理の飛躍みたいなもの、言わぬが花みたいところが結局よく見られるというふうになって出てきているんだろうと思います。

中国イスラームは、外との関係がどうなるかによって、中国のイスラーム教徒のイスラームの学習の仕方がガラッと変わってくるんですね。昔ながらのカリキュラムに基づいて、アラビア語の文法書を勉強して、コーランを読んで、それでペルシア語の文法書を読んで、(サーディーの)ゴレストーン(『薔薇園』)も読んで、それが最終的には中国イスラームの人達が言ってるところの道学に入って、人間完成をすると、全人になるというのが最終目的なんでしょうけども、そういうカリキュラムが長く続いてたんです。でもある時期から、たぶん中央アジアにボルシェビキ革命の波が及んで中国イスラーム世界の人達がブハーラーに留学しなくなっちゃったということによって、非常に大きな影響が出てきたんでしょうね。みんなアラブ世界に雪崩をうって勉強しに行くことになって、こういうとアラブ世界の人は怒るかもわからないけども、ペルシア世界——優雅で優美な世界——と切れてしまう。とりわけ中央アジアの人達というのは、アミーレ・ホスロー・デフラヴィーという神秘主義の詩人が好きですね。非常に言葉遊びがよく行なわれる、そういった作品を書き残している。サマルカンドとかタシュケントとかあいつたところへ行ったら何を勉強しているかと訊ねると、アミーレ・ホスロー・デフラヴィーをみんな勉強するんですね。あれは、よそでは見かけない。その伝統が残ってるということは、ブハーラーで勉強した中国イスラーム教徒の人達はアミーレ・ホスロー・デフラヴィーなんかを勉強させられただろうと思うんです、恐らくね。

彼の書いたマスナヴィーだとかそういったのが中国の方にも伝わっているんじゃないかと思いますが、今はなかなか厳しい状況で、調査が出来なくなってきている。ほとぼりが冷めるのを待たないといけない。

仁子 最後に、中国ムスリムは一応スンナ派と言われてますが、シーア派の影響があるんじゃないかというふうにも言われてますよね。この点はどのようにお考えですか？

松本 ペルシア語世界の影響がとても強いということもひとつ、シーア派的な発想が入り込んでいく可能性のひとつだと思いますね。中国は法学的にはハナフィー派ですからね。ハナフィー派法学ってのは、シーア派の法学ジャアファル派とほとんど変わらない法運用の仕方をするグループですし、アブー・ハニーファが12イマーム・シーア派第6代イマーム・ジャアファル・サーディクのお弟子だったということがありますので、ハナフィー派の中に残ったシーア派的な部分が中国イスラームの中に現れているというふうには言えるのかもしれませんがね。その辺のことは詳しく調べるのが出来るかどうか、決定的な証拠が出てくるかどうかはわからない。

中西 京都大学の白眉センターの中西と言います。今日は興味深いご講演を頂いてありがとうございました。ひとつちょっと私事で恐縮なんですけど、この夏のラマダーンの時、雲南に行かれていたのですね。実は僕も同じ時、昆明におりまして、順城街の辺りをウロウロしていました。開齋節は寝坊して行けませんでしたけど、あれに行っていたら先生にお会い出来た。

松本 そうそう。姚継徳っていう雲南大学のイラン研究センターの所長さんの案内で、連れ合いも

一緒に行ったんですけどね。

中西 ちょうど先ほどおっしゃられた馬徳新のお墓も、まさに先生と同じコースを辿って、この夏に初めて行きました。それはともかくとしまして、今ちょうどその馬徳新に関心があるので、彼についての質問です。お話の中で、馬徳新がメッカ巡礼に行った時にワッハービーと会ったとおっしゃられたと思うんですけど、そのような事例から、馬徳新っていうのは、中国のイスラーム思想史の中で、前近代にイスラーム世界に生で触れた数少ない思想家の一人っていう位置づけが出来ると思うんです。それで、彼の巡礼経験がたぶん彼の思想に結構大きなインパクトを与えたというか、今まで中国になかった思想を彼にもたらしたのではないかなと予想しております。そこで、馬徳新に新しく見られた思想で、かつ当時の西アジアの思想的影響が想定されるようなものが、実際あるかどうか、もしお気づきの点があったら教えていただきたいと存じます。

松本 ひとつはね、メッカ巡礼からの帰りにシンガポールに1年間滞在するでしょ？その際に、ゾディアック、黄道ですかね、あれの観測をするとかね、非常に科学的な知識を西アジアから仕入れて、それを実際に利用するとかいうこともやった人で、西アジア世界に伝わっていた科学の伝統というものにもとても関心があった人ですよ。それは、それまでの中国イスラームの思想には見られなかったことだろうと思います。それから特に面白いと思うのは、ブーシーリーっていう人のアラビア語の詩を翻訳した、馬徳新の『天方詩経』っていう作品がありますが、あのアラビア語詩も彼が初めて外国語に翻訳しました。英語に翻訳される150年前に馬徳新が漢文に翻訳しているんだとかいってみんな自慢してます。そういうそれまでの中国イスラームの知識人がやらなかったことを彼はやってる。加えて、やはりさっき申しましたけども、西アジアの方でいうマアーデ・ジスマーニー（肉体復活）について非常に細かな論考を『大化総帰』の中で残しています。それまでの中国イスラームでは、それはコーランにそう書いてあるからそんなもんです、という程度でしかなかったのが、馬徳新は、どうやってマアーデ・ジスマーニーっていうのが起こるのかっていうことにいろいろ頭を絞ってる。その点で彼は儒の世界には全然いない。怪力乱神は語らないという伝統から完全に外れて、イスラーム世界の方に足場を移しちゃってる。そういうところがやっぱり違うのかなと思いますけどね。

中西 それは、やっぱり馬徳新がメッカ巡礼を行った当時の西アジアの雰囲気の影響を如実に受けているということでしょうか？

松本 そうでしょうね。やっぱりイスラーム教徒ってそれをちゃんと考えないと、イスラーム教徒と言えない。

川添 京都大学文学研究科の川添と申します。松本先生とは、色々な学会や研究会でお付き合いをしてきたんですけど、こんなにまとめてご自分の生涯に即して語らっていただいて本当に有意義でした。私は西洋のスコラ哲学が専門です。たまたまですけども、この11月に中世哲学会でプラトニズムに関するシンポジウムをやりますが、先生にイブン・スィナーの話をしてもらって、それから慶応大学の上枝さんっていう方にトマス・アクイナスのエッセ（存在）の問題を話していただくことになってますね。その時はトマスに対してイブン・スィナーの影響がどうであったかっ

ていう観点が中心になると思うんで、今日は逆の方からお伺いしたいんです。つまり、西洋は何をイスラームから受け取って、何を受け取らなかったのかっていうことですね。何を受け取ったのかももちろん解釈があるんですけど、イスラーム思想研究の立場から見て、西洋はこれを拒否した——とまで言わなくても受け取らなかった——面はこれだと言える面があるのかなのか、その点についてコメントございましたら非常にありがたいと思います。

松本 難しい質問ですね、パスしたい(笑)。イスラーム思想の中で非常に重要な概念というのは、ムハンマドの預言者性ということですね。それに並列する形でイエス・キリスト論も預言者性を持つ存在として議論が展開されちゃうわけです。キリスト教世界は拒否しますよね。

川添 それはそうでしょうね。本質的に。

松本 ですから、イスラーム世界の中で発展した預言者論というものに関しては完全にシャットアウト、聞く耳持たないというところがありますね。あと、エッセという言葉を使うときに、存在という事実をどういうふうに受け止めているのかも重要ですね。イスラーム世界には「存在」にあたる言葉が別にあるわけですがけれども、それによって理解が非常に違ってくる。特にイルファーンと呼ばれる神智学の方では存在というのはほんとうに複雑極まりない。これは私が向こうへ行って最初に度肝を抜かれたことなんですけど、「この机は存在の香りがしますね」っていうふうに言うわけです。何それ？と思いますが。西洋哲学でまだ色々なこと勉強しないで、フォイエルバッハだとか、サルトルとかいうのを読んでたきりで、存在の匂いだとか、香りだとかは一言も出てきませんから。イスラーム世界の存在論というのは、香りも色も、この肌触りも温度も、全部含まれてくる。当然ですよ、存在というのは全部を含むわけですから。そういう存在の概念・言葉を使って彼らが存在論を展開しているというところを、中世ヨーロッパの存在論は抜かしているっていいですか、捨象しちゃってるという印象を持ちますね。

川添 つまり存在と本質を一応分けるとすれば、概念化して何であるかということについて、言葉で伝えられるのは本当は本質だけの方だけで、そこから抜け落ちるのが存在だっていうふうにもできるわけですね。それにしてもイスラームでも西洋のスコラ哲学でも、それなりに存在について何か語らなくちゃならない時に、どっかで本質的に自己矛盾的な見方をしている。そういうことがあるかもしれないと思うんですけど、その限りにおいてはどうなんですかね、西洋とスコラの非常にある意味では精緻な言語の使用というものと、イスラームの今おっしゃったような「存在の香り」といった言い方で語ることとの間には、何か違いがあるんでしょうか。

松本 ウジュード〔編集部注：存在を意味するアラビア語〕という言葉をもとにして展開されるイスラーム思想の存在論の中では、結局、概念と概念を明確に区別しないということになりますね。究極的には、ひとつの存在が多様化して個別的存在者になるという世界観を前提にして、存在論が繰り広げられておりますから、そのどれも存在の香りがする。どれも存在の色があるから、どれも存在の味がするとかね。そういうふうに捉えているわけで、基本的にはそこから存在一性論という、さっきから話題になっている話が出てきちゃうわけです。存在から本質が立ち現れてくるという——これはハイデガー的な表現になりますけども——、そういう捉え方をするわけですね。

立ち現れてきたものに存在の香りがくっついてたりするわけですから。そういうところを西洋哲学というのは、なぜか知らないけど、極度に嫌う。少なくとも取り入れていない。これは言語の構造と関係している部分もあるかと思います。インド・ヨーロッパ系の言語にはbe動詞という存在動詞がある、主語と述語を繋ぐ動詞を使って存在論を展開する。ところが、特にアラビア語などセム系の言葉にはそういうことがないので、「見出される」という意味の言葉を使って存在論が展開されているという側面があります。その辺は言葉の問題とも結びついているのかなという気はしますね。

石田 アジア・アフリカ地域研究科の石田と申します。私はムガル朝のシャー・ワリーウッラーを今、研究しています。イランの大学の神学部のカリキュラムに関連して少しお伺いしたいのですが、同じペルシア語で書かれてたつていう理由で、ムガル朝の思想家がイランで勉強、研究されていたりするののかどうかというのをちょっとお聞きしたいと思います。それから神学部の中で比較研究みたいなことが行なわれているのでしょうか？キリスト教や仏教などと比較した研究が、現在、イランで行なわれているのか興味がありまして。

3点目に、現在のイランのスーフイズムの実践について教えていただければと思います。というのも、倫理学の本をちょっと読んでいたんですけど、理論については色々書いてあるんですが、実践はスーフイズムに任せてあるよみたいな記述が結構出てきて、結局実践で何をすればいいのかわからないのがあんまり出てこないんですね。本当のところ、実践で何をしているのかについて最近すごく興味をもちまして、イランの事情をもしご存知であれば教えていただきたいと思います。よろしくお願いします。

松本 シャー・ワリーウッラーの書いたものをイランで読んでるかといえば、読んでないですね。シャー・ワリーウッラーっていう人はいわゆるスンニー派でしょ。スンニー派のものは全部読まないというわけでもないんですけども、今のイランというか、私のいた頃のイランでは読んでいませんでしたし、今でもそういうのはあんまり読まれてないと思います。ただ、法学者の監督権とかイスラーム政体とかいうことを考えるにあたって、シャー・ワリーウッラーの言ってることはかなりイスラーム世界に影響を与えているとは思っていますので、神学部の人というよりもむしろ政治学だとかそういうことを勉強している人がシャー・ワリーウッラーの政治論だとかを時々勉強することはあります。

2点目の、他の宗教のことを勉強しているかということですが、最近はよくしているみたいですね。私が行った頃はほとんどシーア派に凝り固まっておりましたから、そういうことの知識を持った方っていうのは少なかつたんですけど。特にテヘランで王立哲学研究所っていうのが作られて、(セイイェド・ホセイン・)ナスルさんの弟子でヴェーダーンタ哲学研究者のシャーイーガンによって、インドの古代哲学が紹介されるとかいうことも行なわれております。革命後には比較思想みたいなことも大学で取り上げられるようになっておりました。私がいいた頃にははまだそんなことはなかつたですね。こういう研究をしている人は、知的好奇心というのに基づいてやってる人が多いですね。イスラーム、シーア派の思想の布教とか多宗教への論駁というスタンスで研究しているわけではないようです。

3点目に、現代イランのスーフイズム実践についてですが、いわゆるタリーカっていうスーフィー教団、これがイランにいくつもあります。一番大きいのがシャー・ニーマトッラーヒー教団の分派

のグナーバーディー派が盛んに行なわれておりますね。そこではいわゆるムルシド(指導者)を中心に、コーランの解釈についての勉強会だとかが行なわれております。会員自身が言ってる数字を信用していいのかわからないですけども、グナーバーディー派のスーフィーのメンバーは1500万人いると言いますね。イラン西部のちょうど私がおりましたマシュハドの南の方にグナーバードっていう街があって、そのあたり一帯でサフランを栽培しているんですね。サフランによる収入を基本にしながら、教団経営をして、そのメンバーの人達が色々な人間完成のための修行をしているというのがあります。もちろんイランは広いですから、地域地域によって色々なスーフィー教団というのがあって、他のところはまた他のことをやってるんだと思いますけども。

山本 同志社大学神学部の4回生の山本直輝と申します。今、オスマン朝シリアのアブドゥルガニー・ナーブルスィーの存在一性論について卒業論文を書こうとがんばっております。先生のお話の中で、今のイランの中で存在一性論を修正しようとする動きがあると伺ったんですが、そこでもう少し詳しく、具体的に何が課題として意識されてどう修正されようとしているのかをお伺いしたいと思います。例えば、一見、存在一性論学派と対立しているようなサラフィー主義の思想と行き来するようなことかがあるのかなど、伺いたいと思っております。

松本 何を修正しようとしているかということですね。今までの存在一性論というのが、全てを統一する理論ですよっていう顔をしているけど、実際は全然そうじゃなくて、ずいぶん色々なものを乱暴に排除しちゃってるというところがあるので、もっと個性性みたいなものが大切にされるような存在一性論——修正存在一性論を作っていくと、さっき名前を挙げたような学者さんは書いたり言ったりしていますね。そうすることが、存在一性論の作りあげる権力の野蛮さみたいなものを和らげていくことにつながるだろうというわけで、そういったことを意識しながら存在一性論を修正して、もっと人間の顔をした存在一性論、優しい存在一性論というのを作りたいと思っています。実際に人に対して優しくするとかいうことはずいぶん昔から行なわれているんですけど、存在一性論という理論の枠組みの中にそういった倫理というのを組み入れていくのがなかなか無かったんですね。各時代にある意味で最大公約数的な枠組みを提供していったんですけども、それが時代が経つと非常に荒々しい権力の基盤に変わってしまったというのを、何とかして防ぐような装置を理論の中に取り込んで行こうというのが、彼らの目指している所だろうと思うんですね。存在一性論という大きな普遍的な理論をもうちょっと柔らかい理論に組み替えていくということでもって、イスラームの人々の倫理だとか社会だとかいうものをもういっぺん考え直していこうというのが今の修正存在一性論者だと言えらると思います。

男性 私は中国生まれのウズベク人で、京都大学の人間環境学、国際社会部に所属しています。先生はイスラーム教徒ですか？

松本 いいえ、私はイスラーム教徒ではないです。

男性 アウトサイダーが研究する場合、受け入れる側との間に仲間という意識、共同の生活の習慣とか宗教観とか、価値観とかが出てこない、結論を自分が元々持っている価値観で出してしまう可能性が非常に大きいですね。そこをどうやって処理しているのでしょうか。

松本 私がイスラームを研究する際、アウトサイダーという意識はないです。イスラーム世界にマフラムという言葉がありますが、それはこの人はもう仲間だというふうに認めてしまった場合に用いられる言葉です。そうみなされればアウトサイダーじゃなくなってしまうという、非常に良い文化だと思いますね。先ほドルイ・マッスイニョンの話をしましたけどけれども、本人が研究対象に全く同一化しちゃう研究者もいるんですね。彼はそうやって神秘思想を研究する一方で、アルジェリアの独立運動にもものすごく肩入れして、フランス政府批判をしてアルジェリアの人達を大いに助けているということがあります。マッスイニョンその人は熱心なカトリックの信者ですが、イスラーム神秘思想を研究して、ハッラージュに自己同一化できた人なんですね。こういったことはイスラーム教徒じゃないとありえないというような考え方は、イスラームの精神に反する、非常に排他的な考え方じゃないかいつもイスラーム教徒達に言っております。イスラームは普遍性や開放性を持っていて、そんな排他的な教えじゃない。特にコーランなんかよく読めば、要するに人間みんなイスラーム教徒というようなことが書かれている部分もありますのでね。